

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Nerval作品中でのLes Chimèresの位置
Author(s)	加藤, 宗登
Citation	フランス文学 , 8 : 42 - 49
Issue Date	1966-07-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040877
Right	
Relation	



Nerval 作品中での Les Chimères の位置

加 藤 宗 登

(1)

Les Chimères〔幻想詩集〕は、1854年に *Les Filles du Feu* の終りに、併せて出版された12篇の sonnet である。それぞれの表題は次の通りである。

1. *El Desdichado* 2. *Myrtho* 3. *Horus* 4. *Antéros* 5. *Delfica* 6. *Artémis* 7. *Le Christ aux Oliviers* (1. 2. 3. 4. 5) 12. *Vers dorés*

さて、*Les Filles du Feu* (1854) 出版にあたって、序文として Alexandre Dumas への献辞が添えられたが、その中で Nerval は、

Une fois persuadé que j'écrivais ma propre histoire, je me suis mis à traduire tous mes rêves, toutes mes émotions, je me suis attendri à cet amour pour une étoile fugitive qui m'abandonnait seul dans la nuit de ma destinée, j'ai pleuré, j'ai frêmi des vaines apparitions de mon sommeil. Puis un rayon divin a lui dans mon enfer; entouré de monstres contre lesquels je luttais obscurément, j'ai saisi le fil d'Ariane, et dès lors toutes mes visions sont devenues celestes. Quelque jour j'écrirai l'histoire de cette «descente aux enfers», [. . .]¹⁾ (下線は引用者)

この一節から容易に *Les Chimères* の共通要素をひき出すことができる。例えば <rêve> <amour> <étoile> <nuit> <destinée> <un rayon divin> <enfer> 等々である。そしてこれらの語は <monstre> <lutter> <vision> <celeste> 等と共に *Aurélia* の世界を作る基本語ともなっているであろう。一友人への献辞から敢えてこのような共通語を見出そうとするのは、これは Gérard の病について、Dumas が *le Mousquetaire* (le 10 décembre, 1853) 紙にやや不用意に記事を出したことへの Gérard の弁解であり、当時の Nerval の関心事を洩らし、それを披瀝しようという意図が読みとれるからである。更に上記引用中、下線の箇所は、運命の恋人 Jenny Colon がその原型の Adrienne と重なる *Sylvie* の中の次の一節と同一の obsession から発した同質の image であることは疑いえない。

Cet amour vague et sans espoir, conçu pour une femme de théâtre, [. . .], avait son germe dans le souvenir d'Adrienne, fleur de la nuit éclose à la pâle clarté de la lune, fantôme rose et blond [. . .]²⁾

他に、先の序文の終りにあった «descente aux enfers» という言葉が、*Aurélia* の最後の節になって再び現われている事実も見逃さないであろう。

[. . .] je compare cette série d'épreuves que j'ai traversées à ce qui, pour les anciens, représentait l'idée d'une descente aux enfers.³⁾

以上、それぞれの比較から *Les Filles du Feu*, *Les Chimères* の出版にあたって既に *Aurélia*

にいたる構想が出来上っていたことが窺える⁴⁾。そして又このことは、*Aurélia* の出版を見る前から、Nerval 的な symbolique な語の構成に或る程度の統制が見られるまでにいたっていたことも示していよう。つまり、*Les Chimères* がその前後の散文作品と常に関係を保ちながら、しかも *Aurélia* の構想が見通された中で、その位置が決定されたものと考えられないだろうか。事実 *Aurélia* の titre primitif は *Artémis ou le rêve et la vie* であったから、*Aurélia* と *Les Chimères* の一篇 *Artémis* との間のつながりは確かであると言える⁵⁾。

(2)

そこで *Les Chimères* の中に、他の作品、殊に *Octavie* と *Aurélia* に見られる image を探ってみたいと思う。先ず *Myrtho* の 1^{er} quatrain の中の、《Aux raisins noirs mêlés avec l'or de ta tresse.》という詩句には、*Octavie* の次の一節、

[...] la pensée du rendez-vous qui m'avait été donné par la jeune Anglaise m'arracha aux fatales idées que j'avais conçues. Après avoir rafraîchi ma bouche avec une de ces énormes grappes de raisin que vendent les femmes du marché, [...] ⁶⁾ (下線は引用者) に思い出が重なっているであろう。*Octavie* というこのイギリス娘は《une tête blonde》であった。そして *Sylvie* の中の *Adrienne* も同様に blonde であった。更にこの *Octavie* は 1845年7月の *l'Artiste* 紙上では *l'Illusion* という表題になっていた。こうして *Myrtho* では *Naples* の旅行を中心に忘れ得ぬ思い出が単なる個人的経験を脱して詩的 illusion となり、*Pausilippe*⁷⁾ の丘陵や *Vésuve* 火山が、又18世紀に創り出された新しい花 <pâle hortensia> と古い神聖な花⁸⁾ <myrte vert>, *Orient* と *Grèce* の合する *Naples* が、絢爛と展開する。

Myrtho と同様、*Delfica* にも *Naples* の回想が明確に現われている。2^e quatrain の中の《Et les citrons amers où s'imprimaient tes dents,》には *Chanson de Mignon* の《レモンの木》⁹⁾ と次の *Octavie* の中の一節、イギリス娘の思い出とが含まれている。

[...] elle imprimait ses dents d'ivoire dans l'écorce d'un citron:¹⁰⁾

最も難解で且つ魅力に富む *El Desdichado*, *Artémis* にも、*Octavie* に限らず *Aurélia* の思想的背景を看取することが出来ると思う。

先ず *Artémis* の 2^e quatrain と tercet にそれぞれ <rose> が出て来る。バラは信仰の上で伝統的に christianisme——*Marie* 及び *sainte*——に結びつく。2^e quatrain.

《La rose qu'elle tient, c'est la *Rose trémière*.》の中の <Rose trémière> に関して、P. Eluard 所有の manuscrit に Nerval の付している note が、《*Philomène*》¹¹⁾ となっており、又最後の vers, 《sainte de l'abime》には《*Rosalie*》と注記してあるから、いずれも *Naples* の聖女を意味している。¹²⁾ 即ち 9^e vers の

《*Sainte napolitaine* aux mains pleines de feux,》に同化され、そしてこれが 10^e vers では更に《*Rose au cœur violet*》となり、*Octavie* の次の一節に現われる 幻の女と同一の image であることを明確に示していよう。

[...] une figure de sainte *Rosalie*, couronnée de roses violettes, semblait plus loin

protéger le berceau d'un enfant endormi:¹³⁾

そうすると最後の tercet の《Roses blanches》は何を象徴しているのでしょうか。Aurélia 第Ⅱ部第2章に、自分のために祈ってくれた <Elle> が失われたという幻覚にとられる。

Du haut du ciel, elle pouvait prier pour moi l'Époux divin [. . .] L'abîme a reçu sa proie! Elle est perdue pour moi et pour tous! . . .¹⁴⁾

これは恐らく Sainte Philomène か, sainte de l'abîme と結びつくものと考えられる。Sainte Philomène は19世紀に創作された聖女らしいが、これについては Jean Richer の引用する légende¹⁵⁾ が最もふさわしいようである。それによると、Philomène はギリシャの王子の娘であるから、結局 paganisme grec を代表し、それに <sainte> 即 christianisme, と Pompéi の遺跡のある Campanie 即その神殿の示している Isis 女神信仰, との三つが一つになって、いわば Nerval の syncretisme を示しているというのが rose の合作からくる意味であろう。そうすると《roses blanches》はどうか。

Bibliothèque Nationale, 1955, n° 297, l'Exposition Nerval カタログの注¹⁶⁾によると、

Dans *Octavie* une figure de cette sainte, couronnée de roses violettes, veille sur l'enfant de la bohémienne napolitaine; quelque peu magicienne. Dans l'esprit de Nerval, la rose blanche de la sainte préservée et toute céleste s'oppose à la rose violette de la sainte de l'abîme.

<rose blanche> を守護された全く天上の聖女のものとする一般的な認識はうなずけないことはないが、quelque peu magicienne な <rose violette> との対比の仕方に問題はないだろうか。Nerval の <rose blanche> から受ける意味は、上記のカタログにある註の解決のように単純なものではないと思われる。<rose violette> が Nerval にあっては不吉を表わす何者でもなく、むしろ syncretisme と更に殉教の意味さえも含むいわば彼の理想像となっているところから推して、<rose blanche> を別の意味での対比で考えられないであろうか。そこでもう一度 *Octavie* に帰って見よう。

Mourir, grand Dieu! pourquoi cette idée me revient-elle à tout propos, comme s'il n'y avait que ma mort qui fût l'équivalent du bonheur que vous promettez? La mort! ce mot ne répand cependant rien de sombre dans ma pensée. Elle m'apparaît couronnée de roses pâles, comme à la fin du festin;¹⁷⁾ (下線は引用者)

これは確かに roses blanches ではないが、これに続く vers,

《Tombez, fantômes blancs, de votre ciel qui brûle:》では上記 *Octavie* の引用に非常に接近していることが窺える。そこで、《roses blanches》を単に toutes célestes なものと見ることは妥当ではないように思える。むしろ mort への誘いを意味するものではないかと考える。

このように解釈を進める時、*Artémis* の中で重要な位置を占める sainte—rose の意味が、*Octavie* との連関をより強く示していることがわかる。また註2)の引用文に見られる *Sylvie* の中の Adrienne の思い出につながる fantôme の一連の描写にも、死にかかわる

<rose blanche> の雰囲気を読者の言葉自身から或はその意味あいから感じられるようにさえ思えるのである。

さて、最後に *El Desdichado* の 1^{er} quatrain に例を見ると、

«Ma seule étoile est morte,—et mon luth constellé Porte le soleil noir de la *Mélancolie*.»

これは明らかに *Aurélia* 第 II 部第 4 章の一節、

Les étoiles brillaient dans le firmament. Tout à coup il me sembla qu'elles venaient de s'éteindre à la fois comme les bougies que j'avais vues à l'église. [. . .] Je croyais voir un soleil noir dans le ciel désert et un globe rouge de sang au-dessus des Tuileries.¹⁸⁾

の中にその忠実な投影を見ることが出来よう。しかしながら 2^e quatrain に入ると、

«Dans la nuit du tombeau, toi qui m'as consolé,

Rends-moi le Pausilippe et la mer d'Italie,

La fleur qui plaisait tant à mon cœur désolé,

Et la treille où le pampre à la rose s'allie.»

このように Naples の近く Pausilippe の丘陵、ブドウ棚、ancolie の花、それに恐らくは Virgile の墓などの souvenirs が、1^{er} quatrain に比して調子のやわらかい、回想的な表現で展開され、*Octavie* の世界を詩的な普遍性に変えている。言葉を換えれば、*Octavie* の中に、Nerval の苦しみ、求め、癒された *Chimères* の足跡を容易に見出すことが出来るのである。

以上いくつかの用例の比較により、*Les Chimères* が *Les Filles du Feu* 中の *Octavie* や *Sylvie* (*Isis* も数えることができると思うが) それに *Aurélia* と思想的に密接なつながりがあることが認められた。更に *Les Chimères* 出版の時には *Les Filles du Feu* から *Les Chimères*、*Aurélia* へと Nerval の神秘的な syncretisme の programme はほぼ完成していたものと推定された。

(3)

次に *Les Chimères* を通じて現われる共通した特徴をひき出して見たい。それは逆に、他の作品との相違を際立たせ、*Les Chimères* の位置をより明確に示すことになるであろう。まず <feu> の幻影である。そもそも火の幻影は表題に始まる。ギリシャ神話では単数の *Chimère* は架空の怪獣 <chimaera> で、前部からライオン、山羊、竜の三つの形をそなえていて、火焰を武器とする¹⁹⁾。Virgile の *Énéide* に出て来る怪物であるから Nerval は恐らく *Les Chimères* の中にこれを想像していたものと思われる。詩集の最後にある *Vers dorés* その他 *Myrtho*、*Delfica* において、Virgile から強く靈感を受けていることは既に指摘されている²⁰⁾。各詩篇が焰を吹く *chimaera* の一部だと考える時、実に象徴的な表題と言える。そして、この火は或時は地下に命脈を保ち続け、大地をゆるがす Cain の一族となる。詩篇中随所に火の輝きと底知れぬエネルギーを認めることができる。

«Je pense [. . .] / Au Pausilippe altier, de mille feux brillant, (Myr.) v. 2

《Je sais pourquoi là-bas le volcan s'est rouvert (Myr.) v. 9

《Et de cendres soudain l'horizon s'est couvert (Myr.) v. 11

《C'est le dieu des volcans et le roi des hivers! (Hor.) v. 8

《J'ai parfois de Caïn l'implacable rougeur (Ant.) v. 8

《Sainte napolitaine aux mains pleines de feux (Arté.) v. 9

image の舞台は主としてイタリー、その Campanie 更にその中の Naples-Pausilippe-Vésuve となっている。即 *Octavie* の舞台である。

それから <feu> に関連して、神話上の神や人物とその描写、それに *Le Christ aux Oliviers* の中に共通した一つの要素が感じとれる。それは先ず次のような神々によって象徴される <force> である。Iacchus, Kneph, Isis, Cybèle, Horus, Hermès, Osiris, Antéros (=Anti-Amour), Antée, Caïn, Artémis 等。macrocosme と microcosme の contraste の効果と相俟って <force> は一段と偉大さを増しているであろう。

そして次には、以下のような詩句に見られる <violence> である。

《Depuis qu'un duc normand brisa tes dieux d'argile, (Myr.) v. 12

《Le dieu Kneph en tremblant ébranlait l'univers: (Hor.) v. 1

《Je retourne les dards contre le dieu vainqueur (Ant.) v. 4

《Sous la pâleur d'Abel, hélas! ensanglantée,

《J'ai parfois de Caïn l'implacable rougeur! (Ant.) v. 7-8

《La terre a tressailli d'un souffle prophétique... (Delf.) v. 11

《Frères, je vous trompais: Abîme! abîme! abîme!

《Le dieu manque à l'autel où je suis la victime... (Le Christ.) I, v. 12-13

Les Chimères を通じて見られる Feu—Force—Violence はこうしてこの詩集の基本的姿勢となっているようである。そして、この primitif な énergie を示す語群が、緊密な短詩形表現によって一層の力感を誘発する。*Myrtho*, *Delfica*, *Artémis* は Apollon の oracles を告げる巫女達への allusion であると言われる²¹⁾。調子も他のものに比較してやわらかいが、上例に見たように、それらも力強い要素を欠くようなことはない。これは詩と散文作品との相違を考慮に入れてもなお、この詩篇前後の作品には見ることの出来ない特徴である。

(4)

先程 Naples-Vésuve を <feu> の image と結びつけたが、Pausilippe には <Tombeau de Virgile> という monument があり、この下の七百米の洞窟 (*Octavie* にも記されている。) というのは Cumes の sibylle のものではなかったろうか。普通 Delphes の巫女と Cumes の巫女が同一に扱われ、libye と Babylone の巫女が混同され、かくして二つの groupe に集約される所から²²⁾、Myrtho—Delfica (Daphné)—Artémis を sibylles occidentales としてここに集めることができる。更に Naples—Vésuve から Pompéi の遺跡、そこに見る Isis 神の神殿、この廃墟を前にして Gérard は次のように確信を得る。

Le christianisme primitif a invoqué la parole des sibylles et n'a point repoussé le témoignage des derniers oracles de Delphes. [. . .] Loin de moi, certes, la pensée d'avoir réuni les détails qui précèdent en vue seulement de prouver que la religion chrétienne a fait de nombreux emprunts aux dernières formules du paganisme: ce point n'est nié de personne. Toute religion qui succède à une autre respecte longtemps certaines pratiques et formes de culte, qu'elle se borne à harmoniser avec ses propres dogmes.²³⁾

Nerval の syncretisme が以上のように巫女を経て、Isis 神を中心として、Campanie に結集される時、volcanique な éclat を伴う *Les Chimères* の宇宙は響き合い、ふつつつと Caïn の énergie が滾り、創造の mythe が展開する。 *El Desdichado* の絶望的でしかも高い調子、そして又 *Artémis* の mystérieux な告白調も、この中で完全に impersonnel なものとなり、orgueilleux な énergie が神話的次元に高められているようである。

Artémis を中軸とする星座、この宇宙には単一な物語は望めない。それぞれの星が偉大な énergie を持って、mythe の éléments となり、独特な風土を奏でていると言える。これが正に <chimère> 的現象であろう。

しかし *Les Chimères* には panthéisme, polythéisme の世界とその緯糸をなす syncretisme の思想があり、これが *Les Filles du Feu* の中の諸篇、特に *Octavie*, *Isis*, *Sylvie* と密接な関係を持っている。 *Octavie* の有する異教的、*Isis* における諸教混淆的、そして *Sylvie* のキリスト教的思想は極めて近い形で *Les Chimères* にも存在した。しかしそれぞれでもなお *Les Filles du Feu* の個人体験的な、personnel な雰囲気を持つ描写は *Les Chimères* といちぢるしい対照をなしている。それは sonnet という形式を通じて Nerval は sentimental な面を極度に抑え、Albert Béguin の評言にある «l'étonnante simplicité de ses moyens d'expression» と «sa syntaxe est normale»²⁴⁾ という特質を持ち、一種 primitif で classique な味わいを出していることにもよると思われるが、何よりも描写された宇宙が人間的尺度を超えた énergie の世界に高められたことにあるであろう。運命 (le destin—*El Desdichado*) に従うことを知る者の orgueil にみちた序奏が奏でられると、花が、聖女が、巫女が、女王が、妖精が、女神が *Chimères* の宇宙の essentiel な élément として立ち上る。このように *Les Filles du Feu* の個人的世界から神話の世界への脱皮は遂げられたであろう。

ところが、初めに検討した如く *Les Chimères* を出版する時、Nerval は既に *Aurélia* の構想を持っていた筈であった。にも拘らず、*Les Chimères* の中に <la Vierge> を導くことをしていない事実を我々は看過することはできない。異教的世界の vitalité の中に殉教の聖女 Sainte Rosalie, Sainte Philomène, Sainte de Sicile, Sainte Gudule 達を舞台にのぼせても <la Vierge> を登場させることはできなかつたと考えられないだろうか。しかし <rose> が <la Vierge> の象徴であったことを考えあわす時、Nerval の脳裡に Marie を中心とする救霊の神話が既に用意されていたと想像出来ないことはない。ともあれこれが *Les Chimères* の宇宙の限界であろうと思われる。 *Les Chimères* は確かに一つの élévation にちがいない。しかしそこには未だ caïnisme が、<feu> と結びついて激しく燃えてい

た。<la Vierge> が聖なる母として真に救いの mythe に姿を現わすためには *Aurélia* を待たなければならなかったわけである。*Aurélia* において Nerval の築いて行く宇宙は人間の立場からの神聖な Drame である。そこに到着する迄に、*Les Chimères* は Nerval の必ず扉を叩いておかなければならない神々の世界であったと思われるのである。

[1965年11月19日]

[註]

- 1) G. de Nerval: Œuvres, Tome 1 (Pléiade) P. 158 引用箇所を含む大部分は、既に *l'Artiste* (10 mars 1844) に *Roman tragique* と題して発表されたものである。
- 2) *ibid.* pp. 246-247
- 3) *ibid.* P. 414
- 4) Pierre Audiat は docteur Blanche への Nerval の手紙から、1853年12月より前に *Aurélia* は書き始められていると推定する。(*L'Aurélia de G. de Nerval*, Champion. P. 9)
- 5) Jean Richer: *Gérard de Nerval et les doctrines ésotériques* (Le Griffon d'Or) P. 113
- 6) G. de Nerval, *liv. cit.* PP. 290-291
- 7) Jean Richer = *Nerval, Expérience et Création* (Hachette) P. 334 によると、Pausilippe は <cessation de la tristesse> を表わす。
- 8) G. de Nerval, *liv. cit.*, Tome 2 (Pléiade) P. 66
- 9) G. de Nerval: Œuvres, Tome 1 (Classiques Garnier) P. 700, note 2, P. 701, note 5
- 10) G. de N., *liv. cit.* (Pléiade) Tome 1, P. 286
- 11) Cf. J. Richer, *liv. cit.* (Le Griffon d'Or) PP. 120-121
- 12) G. de N., *liv. cit.* (Class. Gar.) Tome 1, P. 703, notes 5. 6
- 13) G. de N., *liv. cit.* (Pléiade) Tome 1, P. 288
- 14) *ibid.* P. 391
- 15) Cf. 註 11)
- 16) G. de N., *liv. cit.* (Class. Gar.) Tome 1, P. 703, note 5
- 17) G. de N., *liv. cit.* (Pléiade) Tome 1, PP. 287-288
- 18) *ibid.* P. 397
- 19) Cf. Virgile: *Énéide* VI. vers 288
- 20) Cf. G. de N., *liv. cit.* (Class. Gar.) Tome 1, P. 709 note 2.
- 21) J. Richer, *liv. cit.* (Hachette) P. 347, P. 355
- 22) *ibid.* P. 355
- 23) G. de N., *liv. cit.* (Pléiade) Tome 1, P. 302, *Isis*
- 24) Albert Béguin: *Gérard de Nerval* (José Corti) P. 102

参 考 文 献

- Jean Richer: Nerval, *Expérience et Création* (Hachette, 1963)
Jean Richer: *Gérard de Nerval et les doctrines ésotériques* (Le Griffon d'Or, 1947)
Jean Gaulmier: *Gérard de Nerval et les Filles du Feu* (Nizet, 1956)
Pierre Audiat: *L'Aurélia de Gérard de Nerval* (Champion, 1926)
Albert Béguin: *Gérard de Nerval* (José Corti, 1945)
André Lebois: *Vers une élucidation des Chimères de Nerval* (Archives des Lettres modernes, mars 1957)
Raymond Jean: *Nerval par lui-même* (Seuil, 1964)
Gérard de Nerval: *Œuvres*, Tome 1, Tome 2 (Bibliothèque de la Pléiade)
Gérard de Nerval: *Œuvres*, Tome 1 (Classiques Garnier, 1958)